

へフリガー/日本の歌曲を歌う(ドイツ語訳による) [完結編]
Ernst Haefliger Singt Japanische Lieder (Heft III)

- ① 花の街 (江間章子作詞/團 伊玖磨作曲) [3:17]
Blumenstadt [S. Ema (1913-2005) / I. Dan (1924-2001)]
- ② 初恋 (石川啄木作詞/越谷達之助作曲) [2:55]
Erinnerung an die erste Liebe [T. Ishikawa (1880-1912) / T. Kositani (1909-1985)]
- ③ 我は海の子 (宮原晃一郎作詞/作曲者不明) [3:56]
Ich bin ein Sohn des Meeres [K. Miyahara (1882-1945) / Anon]
- ④ おやすみなさい (中井昌子作詞/中田喜直作曲) [2:25]
Gute Nacht [M. Nakai / Y. Nakada (1923-2000)]
- ⑤ もう直き春になるだろう (城 左門作詞/山田一雄作曲) [4:34]
Nun wird es Frühling [S. Jou (1904-1976) / K. Yamada (1912-1991)]
- ⑥ 夏は来ぬ (佐佐木信綱作詞/小山作之助作曲) [1:39]
Der Sommer ist da [N. Sasaki (1872-1963) / S. Koyama (1863-1927)]
- ⑦ 紅葉 (高野辰之作詞/岡野貞一作曲) [2:08]
Herbstlaub [T. Takano (1876-1948) / T. Okano (1878-1941)]
- ⑧ 冬の夜 (文部省唱歌) [2:28]
Winterabend [Anon]
- ⑨ 夜明けがらす (野口雨情作詞/山田耕筰作曲) [1:57]
Morgenkrähe [U. Noguchi (1882-1945) / K. Yamada (1886-1965)]
- ⑩ 鴉 (清水重道作詞/信時 潔作曲) [1:04]
Der Rabe [S. Shimizu (?-1958) / K. Nobutoki (1887-1965)]
- ⑪ 子守唄 (日本古謡/山田耕筰補訂) [2:51]
Wiegenlied [Anon / K. Yamada]
- ⑫ かなかな (北原白秋作詞/山田耕筰作曲) [1:27]
Abendzikaden [H. Kitahara (1885-1942) / K. Yamada]
- ⑬ 五木の子守歌 (日本古謡) [3:57]
Wiegenlied aus Itsuki [Anon]
- ⑭ 鐘が鳴ります (北原白秋作詞/山田耕筰作曲) [2:47]
Die Glocke tönt [H. Kitahara (1885-1942) / K. Yamada]

- ⑮ 箱根八里は (日本古謡/山田耕筰作曲) [2:15]
Hakone, deine Pfade [Anon / K. Yamada]
- ⑯ 花嫁人形 (露谷虹児作詞/杉山長谷男作曲) [3:30]
Warum weinst du, Blumenbraut? [K. Fukiya (1898-1979) / H. Sugiyama]

ロシア人形の歌 (北原白秋作詞/山田耕筰作曲)
Lieder russischer Puppen [H. Kitahara / K. Yamada]
- ⑰ ウエドロ (水桶) [1:43]
Widro (Der Wasserkurug)
- ⑱ デューウオチカ (娘さん) [1:44]
Dewotschka (Das Fräulein)
- ⑲ ニヤーニシユカ (乳母) [1:19]
Nanuschka (Die Amme)
- ⑳ カロウヴァ (牛) [2:37]
Karowa (Die Kuh)
- ㉑ ロートカ (小舟) [1:18]
Lotka (Das Boot)

[ボーナス・トラック]

(1993年11月1日大阪ザ・シンフォニーホールにおけるライブ)

- 風に寄せてうたへる春のうた (三木露風作詞/山田耕筰作曲)
Kaze-Ni-Yoscte-Utaeru-Haru-No-Uta [R.Miki (1889-1964) / K. Yamada]
- ㉒ I. 青き臥床をわれ飾る [1:52]
I. Aoki-Fushi doko-Wo-Ware-Kazaru
- ㉓ II. 君がため織る綾錦 [1:55]
II. Kimi-Ga-Tame-Oru-Ayanishiki
- ㉔ III. 光に顔ひ日に舞へる [2:15]
III. Hikari-Ni-Furui-Hi-Ni-Maeru
- ㉕ IV. たたへよ、しらべよ、歌いつれよ [1:40]
IV. Tatahe-Yo, Shirabe-Yo, Utaiture-Yo

エルンスト・ヘフリガー (テノール)

Ernst Haefliger (Tenor)

イリーナ・ニキーティナ (ピアノ)

Irina Nikitina (Piano)

ドイツ語訳: 村上紀子 & マルグリット畑中

German-Lyrics translators: Noriko Murakami & Dr. Margrit Hatanaka

ピアノ編曲: 青島広志 (3, 6-8, 13)

Arrangement for Piano: Hiroshi Aoshima (3, 6-8, 13)

録音: 1994年4月 スイス、ブルーメンシュタイン教会 (11-21)

1993年11月1日 大阪ザ・シンフォニーホール (22-25)

Recorded: April 1994, Kirche Blumenstein, Switzerland

Producer: Michael Haefliger / Recordin Engineer: Dr. Peter Wangard / Editing Engineer: Anton Lanz

日本歌曲をドイツ語翻訳で聴くと、もしかして日本人は、心の奥底で癒されるのではないかという話

歌曲は言葉あつてのもの。ドイツ・リートは、ドイツ語の重く深く晦澁とも言えるかもしれない響きと不可分である。パーセルやブリテンのソングは、英語の自由さや機動性と結びついている。何しろ、英語は、あの奔放なシェイクスピアの言語なのだ。そして、日本歌曲とはいうと、日本語だからこそ日本歌曲である。

すると、日本語とはどんな言葉なのだろうか。それは世界に冠たる美しいものだ、主張した人が居た。江戸時代の国学者、本居宣長である。

彼は『漢字三音考』という本で、こんなことを言っている。「外国語はすべて朦朧として濁っている。まるで曇りの日の夕暮れに空を眺めるような響きだ。外国人の発するアアは、ウウのようにもオオのようにもワアのようにも聞こえる。朦朧として濁っているとは、清く正しくないことだから、外国語は結局、野蛮である」。

すると、日本語は？ 宣長によれば、もちろん、朦朧としていないし、濁っていない。清く正しく美しいのである。

なぜそうなるか。現代風に言えば、まずは母音の問題だろう。たとえば、朝鮮語にも英語にもロシア語にも、10種以上の母音があるとされる。それに対し、日本語は一般に5つだけだ。しかも、その5つは、アイウエオという、比較的単純明快

なもののばかりだ。唇を強く張るとか、舌の奥で呻くように出すとか、宣長流に言えば、朦朧として濁った母音がない。

それから、子音の数も比較的少ない。しかも、発音しやすいものに限られている。日本語と言えば、五十音図である。母音が5つに子音が10だから50だ。「ばびぶべぼ」とか「ばびぶべぼ」とかいった音は、日本語では伝統的には「はひふへほ」から派生した音とみなされる。ゆえに、日本語の大本は、50音で済んでしまう勘定だ。

もっとも、母音が5つで、子音が10なら、どこの国の言語でも、自動的に50音になるわけではない。もしも、二重母音や二重子音があり、閉音節語だったら、母音が5つで、子音が10でも、組み合わせは無数になる。二重母音とは、母音をふたつ繋いで、ひとつの音にする。aeとかoiみたいな音だ。二重子音も同様だ。ksとかtpのような音だ。そこに母音が付けば、ksaとかtpiなんて音が出てくるだろう。閉音節語とは、母音ではなく子音で終わる音を持った言語のことだ。efとかumといったかたちだ。

しかし、日本語には、二重母音や二重子音はほとんど存在しないし、また日本語は閉音節語ではなく開音節語である。即ち音は原則として、yaとかwoのように母音で終わる。だから、五十音図で済むのである。

宣長の言う、清く正しく美しい、世界に冠たる日本語とは、つまりこういうものである。子音や母音が限定され、どれも響きが明晰なうえに、音

をややこしくする二重母音や二重子音も現れず、閉音節語的な籠もった響きも排除される。

であるならば、そうした日本語の特性の上に築かれる日本歌曲というものの、単純明快さを身上とするのだろうか。いや、そうでもあるまい。日本語による伝統音楽を思い出してみよう。平家琵琶にしても謡曲にしても義太夫にしても、言葉はとて分かりにくい。日本語の音は、確かに単純だ。しかし、日本人は、それを歌おうとするとき、放送局のアナウンサーのように、単純な音をより明確にすることばかりを考えなかった。むしろ、その逆だ。声を潰したり、曇らせたり、呑み込んだり、鼻にかけたり、いろいろな音色や旋律的な揺れや微妙な強弱を駆使したりし、日常の日本語とは異なる、複雑で多様な響きを作り上げようとしてきたのである。

要するに、単純な言葉の響きをいかにややこしくするかに、日本の伝統音楽の多くが賭けてきたのだ。宣長は、「外国語はすべて臆臆として濁っていて、ややこしく響くから劣っている」と断じた。それは実は、一種の逆説だったとも言える。

江戸時代、武家の重んじたのは、儒学であり、漢文だった。外国の文化と言葉である。たくさんの文字の種類があったり、複雑な言葉の響きがあった方が、深遠な意味を表現できるから優れている

という信仰があったのだ。日本語にコンプレックスがあったのだ。

それは無論、江戸時代に限った話ではない。大和時代から現代までに遡底すると言っていい。日本の伝統音楽の多くが、日本語を分かりにくく響かせる方に靡いたのも、日本語本来のものではない、臆臆として濁った外国語のような響きへの憧れと繋がっていたと、考えてみてもよいのではないだろうか。

日本歌曲は日本語でこそ。それは間違いなく正しい。しかし、もしも、日本人の心の奥底に、古来、単純明快すぎる日本語の響きへの苛立ちがあり、近代の日本歌曲も、そうした苛立ちと深層で結びついているとするならば、きっと宣長なら、「アアが、ウウのようにも、オオのようにも、ワアのようにも聴こえて、どうしようもなく駄目な言葉」と決め付けるに違いない、複雑な響きに満ち溢れたドイツ語にわざわざ直して、日本歌曲を聴くことには、とてつもない意味が出てくるのではないだろうか。

日本人にとって日本語とは何か。日本語に我々は満足してきたのか。50音だから、滑く美しいのかもしれない。が、50音だから、貧しく寂しいのかもしれない。このアルバムには、本源的な問いかけがある。

[片山杜秀]

ヘフリガー/日本の歌曲を歌う[ドイツ語訳による] 完結編

音楽文化研究家 長田暁二

□ 花の街

昭和22年の東京は、空襲の残骸と戦後の混乱で、瓦礫と埃が閉市に濛々としていた。江間章子はNHK『婦人の時間』の委嘱で「今に東京もこの詞のように花咲く街になって欲しい」という、夢と希望を託してこの詞を書き上げた。團伊玖磨はこれを室内楽伴奏の女声合唱曲にまとめて放送、曲が新鮮だったため好評を博した。今では独唱曲としてもよく愛唱されている。

□ 初恋

昭和13年に越谷達之助が、石川啄木の短歌15篇に曲をつけ「啄木によせて歌える」という歌曲集をまとめたが、「初恋」はその中の第1曲目。青春の哀愁、初恋のセンチメンタルを切々とうたった三行詩に、抒情的なみずみずしいメロディをつけたもので、4分の5、4分の4、4分の3と3つの拍子がめまぐるしく変わっているが、曲自体がさわやかでメロディックなため、自然な流れを保ち詩のイメージに融け合っている。

□ 我は海の子

歌詞は、都塵から離れた漁村に生まれ育った、明るい心と強い脊を持つ少年のすがすがしい抱負を述べている。長らく作詞者が不明のままだったが、平成元年5月、鹿児島市加治屋町出身で北欧文学者の宮原晃一郎の作であることが判った。明治43年7月発刊の『尋常小学読本唱歌』で発表さ

れたが、音楽面から眺めても爽やかなメロディは、数多い『文部省唱歌』のなかで最高傑作の部類に属する。

□ おやすみなさい

中田喜直が1958年に作曲した歌曲集『こどものための八つのうた』の8曲目で、彼は「おやすみなさい……」と語りかける言葉のイントネーションとリズムを崩さないようにしながら、抒情的な旋律を巧みに紡ぎ出している。中田喜直らしい美しい夜の歌である。1947年に「六つの子供の歌」を大正末期の詞で書いた作曲者が、10年後、戦後に出来た詞で書いたのが「こどものための八つのうた」である。

□ もう直き春になるだろう

城左門は詩人・小説家。詩人としては城左門、作家としては城昌幸と使い分けた。指揮者としての活躍が主だった山田一雄だが、全12曲からなる歌曲集《祖師ヶ谷より》をはじめ、多くの歌曲、童謡も書いた。この曲も、春を迎えようとする静けさの中に、のびやかな生命感が溢れている曲で、山田の歌曲の中では最もよく歌われている作品である。

□ 夏は来ぬ

毎年初夏になるとこの歌をよく口ずさみ、メロディもテレビ・ラジオからよく流れてくるが、今から見ると言葉が矢鱈に難解である。卯の花はうつぎの花の略称で、初夏に五弁の白い花をひらく。花うつぎ、山うつぎ、卯の花垣など、古来から歌詞に多く詠まれ、ホトトギスと共に夏の二大景物

として親しまれた。水鶏くいなは夏の水辺で、夜から明け方にかけてカタカタ鳴く渡り鳥の一種である。

㊦ 紅葉

明治44年6月発刊の『尋常小学唱歌(二)』に発表された。こんな芸術的、絵画的で大人びた難しい唄が、発表当初は小学二年生用だから驚く。作詞者の高野辰之がこの詞の想を得た場所は、信越本線の碓氷峠の熊ノ平駅(昭和41年6月に廃駅)の錦秋風景という。この付近は今でも列車は軽井沢に向かってのんびりと上り、車窓から眺める風景は、燃えるような紅葉が秋の日に照らされて飽きることを知らない。

㊧ 冬の夜

明治45年に発表された唱歌だが、それから僅か85年間に日本人の生活様式がすっかり変わって、何か昔の抒情が色あせてしまった感ともしびがする。燈火の代わりに蛍光灯が輝き、囲炉裏火の代わりに電気ストーブ、ガス・ストーブ、セントラル・ヒーティングで暖をとる。燈火ちかく衣縫う母、囲炉裏いろりの端に纏まとう父といった情景は、現代の生活からは消え違い過去の影像になった。

㊨ 夜明けがらす

ゆったりとした日本調のなかに、夜明けの静けさをたたえている3拍子の抒情曲である。北原白秋とコンビを組んだ山田耕筰だが、野口雨情とも「箱根の山」「きつねのちようちん」「カッコ鳥」などの童謡を作った。そういえばこの曲も、なんとなく童謡的である。

㊩ 鴉からす(沙羅)から

『沙羅』は昭和10年に作曲されたテノールのための組歌曲で、1丹沢、2あづまやの、3北秋の、4沙羅、5鴉からす、6行々子としより、7占ふと、8ゆめ、の8曲から成る。信時潔の歌曲を代表する作品で、歌曲集としての一貫性はなく、各々日本のな心情を素朴に歌う味わい深いもの。「鴉からす」はコミカルな中にも、芸術的な香りの高い小品である。信時の作風はドイツ古典の手法のなかで、日本的な堅実、厳粛、素朴な歌曲を多く書いた。

㊪ 子守唄

母親が子寝かせに歌う「眠らせ唄」で、戦中派以前の人でこの子守唄を聞かないで育った人はおそらくいないだろうと思われるほど、全国に流布している。山田耕筰はこの編曲譜を、カール・フイッシャーで出版された『Japanese Folk Songs』の中に収めた。フレデリック・マーデンズがこの曲集6曲に解説を書き、歌えるような英訳を入れていた。

㊫ かなかな

大正13年の作品で、山田耕筰と北原白秋は、大正中期から昭和の初頭にかけて、音楽家として、詩人として、日本を代表する芸術家だった。豊かな語彙と詩想、技巧と自由な表現の白秋の詩に、耕筰がどンドン曲づけをはじめたのは大正末期。このコンビに合うと、すべてが健康的で風格が備わり、不思議にも大正のセンチメンタルより垢抜けしたものになった。この曲もそうした中の一曲である。

㊬ 五木の子守歌

熊本県唐津郡五木村は、相良氏の旧藩時代以前から地頭と呼ばれる富家と名子と呼ばれる貧農とに分れ、名子の子女は地頭の家で子守として使われた。その子守娘の間で薄幸の悲しい境遇を嘆く、哀愁を帯びたこの子守唄が歌い継がれた。五木村で歌われる旋律は、我々が平素聴くものとは全く違い、下の句を繰り返す素朴なものである。3拍子に整理したのは古岡裕而で、昭和26年の暮からNHK熊本局で毎日放送された。

㊭ 鐘が鳴ります

詞は大正12年2月『女性』に発表され、同年5月17日に作曲され、15年藤原義江のレコードによって多くの人の愛唱する歌になった。白秋と耕筰の名コンビが意気投合して情熱的に次々と新作を発表していた頃の作品で、もっとも創作に脂が乗った時期の絶品である。前奏の始まるころに“ゆるき民謡の流れにのりて”と書き込まれており、弱音(ppp)で奏される和音が遠い鐘の音のように響く。

㊮ 箱根八里は

箱根八里とは、旧東海道の小田原から箱根の関所をへて三島までのおよそ八里の道のりをいった。長い間、江戸(東)と京都(西)を結ぶ一番の難所かきこで、馬子たちが無聊むらうを慰めるために歌ったのが「箱根馬子唄」である。石畳が続き、杉並木や雑木林の木もれ日ひかりが石畳に映って旅情をそそられる場の雰囲気ふんいきにピタリの唄だった。昭和2年、この「馬子唄」を基にして山田耕筰がピアノ伴奏

を書き、藤原義江の帰朝音楽会で発表した。

㊯ 花嫁人形

少女期を大正末期から昭和初期にすごした人は、落谷虹児の描いた二重まぶたにまつ毛の長い大きな瞳、小さな口、すらっとした体つきの美少女に憧れたロマン時代を懐しく思い出することだろう。大正12年のこと、『令女界』で西條八十の予定していた詞稿が締め切りに間に合わず、大慌てした編集部では代役を虹児に依頼、彼はわずか二時間ぐらいで詞と絵を描いて穴埋めしたのがこの「花嫁人形」である。

㊰ ロシア人形の歌(全5曲)

1ウエドロ(水桶)、2チューウォチカ(娘さん)、3ニヤーニシュカ(乳母)、4カロウヴァ(牛)、5ロートカ(小舟)の5曲からなる連作で、1931年(昭和6年)の作。同年、ソヴィエト各地の演奏旅行をした山田耕筰だが、その旅行先で発表されたため、歌詞の中にロシア語が入っているが、その部分を日本語に訳せば次の通り。

スタラナリ スタロンカ……(ここがわたしのふるさとか、そうだ、そうだよ、ふるさとよ。)

ヤアルマルカ(市場)、コロコル コロコル(リンリンと鈴の鳴るさま)、ルウチェンカ(小川)レビョーンカア(小ちゃい子)、スカミューカ(ベンチ)、ミエーリニツア(水車)

タック タック ハラシオ(そうだそうだ まったくだ)

サバァカ(小犬)、シャープカ(帽子、シャツポ)、ミエドレノ(ゆらゆらとゆれている)

1 HANA NO MACHI
Blumenstadt

1. Über das regenbogenfarbige Tal
da schwebet lind und lau
des Windes luft'ges Band.
Im Reigen tanzend,
im Reigen tanzend
seh ich schon alle ferne.
Ein Liedlein singend
sind sie schon alle fort.

2. Über das schöne weite Meer
blicken sie.
Da ist die Blumenstadt
voll süßem Himmelsduft.
Im Reigen tanzend,
im Reigen tanzend
seh ich sie alle trinken.
Den Frühling preisend
tanzen sie trinken.

3. Hinter dem himmelblauen Fenster
steht sie
und weinet bitterlich,
einsam, verlassen.
Im Reigen tanzend,
im Reigen tanzend
seh ich sie in der Dämm' rung.
Nur eine steht am Fenster
und weinet bitterlich.

花の街

七色の谷を越えて
流れていく風のリボン

輪になって
輪になって
かけて行ったよ
うたいながら
かけて行ったよ
美しい海を見たよ
あふれていた
花のまちよ
輪になって
輪になって
踊っていたよ
春よ春よと
踊っていたよ

すみれ色してた窓で
泣いていたよ
まちの角で
輪になって
輪になって
春の夕暮れ
ひとりさびしく
泣いていたよ

2 HATSUKOI
Erinnerung an die erste Liebe

Auf dem Berg lieg ich im Sand.
Auf dem Bauch lieg ich da im Sand.
Und das Weh der ersten Liebe
von weit her, von weit her,
kehrt zurück.
Lang ist's her, lang ist's her.
An das Weh, an das Weh,
an das Weh denk ich zurück -

ah, ah,
meiner ersten Liebe.

Auf dem Berg lieg ich im Sand.
Auf dem Bauch lieg ich da im Sand.
Und das Weh der ersten Liebe
von weit her, von weit her
kehrt zurück.

初恋

*砂山の砂に 砂にはらばい
初恋のいたみを
遠くおもいいずる日

初恋のいたみを
遠く 遠く
ああ…… おもいいずる日

(*くり返し)

3 WARE WA UMI NO KO
Ich bin ein Sohn des Meeres

1. Ich bin ein Sohn des Meeres. Wo die
Brandung weiß
brauset an den Kiefernstrande, rauschet
laut und leis,
wo der Rauch aus Schilfdachhütte
zieht zur Tür hinaus,
dahin treibt mich stets die Sehnsucht,
da bin ich zu Haus.

2. Kaum geboren, schon ins Bad durchs
Meer man's Kindlein zieht.

Wellen wiegten ein den Knaben,
Sangen's Schlummerlied.
Schöpfte Kraft aus Meeresweite,
sog aus ihr den Mut.
Geist des Meeres und der Wellen
steh'n dem Jüngling gut.

3. Immerdar und überall umgibt mich
Meeresluft.
Ihr entnehm ich tausend Arten
süßen Blumenduft'.
Kiefern rauschen leis im Winde zu
der See Gesang.
Lausche heiter, selig staunend diesem
Himmelsklang.

4. Lang die Ruder, schwer in Händen,
steuer' ich voller Kraft
wohin immer, hier mein Boot auf
Wellenwanderschaft.
Mag auch der Meeresboden u
nergründlich sein.
Hier nur ist mein Lebensgarten,
hier nur möcht' ich sein.

5. Wie viele Jahre schon am Ruder
und im Boot!
Leib gebräunt von Wind und Sonne,
glänzend kupferrot.
Arme hart wie Stahl und Eisen, Herz
mir brennet heiß.
Ich bin ein Sohn des Meeres und der
Brandung weiß.

6. Triebe gar ein Eisberg groß das
Boot mir vor sich her,

peitschten Wirbelstürme auf die
Wellen und das Meer,
Eisberg, komm nur! Sturm, nur
brause! Trotzend der Gefahr
bin ich doch ein Sohn des Meeres,
bleib es immerdar.

我は海の子

1. 我は海の子 白浪の
さわぐいそべの 松原に
煙たなびく とまよこそ
わがなつかしき 住家なれ

2. 生れて潮に 浴して
浪を子守の 歌と聞き
千里寄せくる 海の気を
吸いてわらべと なりにけり

3. 高く鼻つく いその香に
不断の花の かおりあり
なぎさの松に 吹く風を
いみじき樂と 我は聞く

4. 又奈のろかい 操りて
行手定めぬ 浪まくら
百學子尋 海の底
遊びなれたる 庭広し

5. 幾年ここに きたえたる
鉄より堅き かいなあり
吹く塩風に 黒みたる
はだは赤銅 さながらに

6. 浪にただよう 氷山も
来らば来れ 恐れんや

海まき上ぐる たつまきも
起らば起れ 驚かじ

4 OYASUMINASAI
Gute Nacht

Gute Nacht,
bis morgen der Zweige Schatten
tanzen und flimmern an der Tür,
bis morgen die Spatzen
beginnen zu schwatzen,
bis morgen früh die Bergespitzen
und Wipfel der Bäume glüh'n,
Gute Nacht bis morgen,
bis morgen dann die Nacht ist vorbei.
Gute Nacht.
Mmm.....

おやすみなさい

おやすみなさい
木の影が
とびらの上にゆれるまで
すずめがおしゃべり
し出すまで
山が朝日を浴びるまで
おやすみなさい
またあした
夜が遠くへかえるまで

5 MO JIKI HARU NI NARUDARO
Nun wird es Frühling

1. Nun wird es Frühling, spürst du es

denn auch?
Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Lau das Wasser im Quell,
Blütenknospen so hell,
leise nieselt Regen hernieder, wie Rauch.
Spürst du es, Geliebte, holde,
nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?

2. Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Der Schachtelhalm, der Löwenzahn,
Raps fängt auch zu blüen an,
Schmetterlinge um den Strauch.
Spürst du es, Geliebte, holde,
nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?

3. Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Und dann, am Zwanzigsten, im Monat März,
Geburtstag feierst du, mein Herz.
Die Pfirsichbäume blühen dann,
ein Blütenhauch.
Spürst du es, Geliebte, holde,
nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?
Nun wird es Frühling, spürst du es denn auch?

もう直き春になるだろう

もう直き春になるだらう、
水は温み、草は萌えて、
煙りの様な雨が降り、いとしいものよ、
もう直き春になるだらう。

もう直き春になるだらう、
土筆や蒲公英、さては菜の花、
さうだ蝶々が舞って、いとしいものよ、
もう直き春になるだらう。

もう直き春になるだらう、
その三月廿日はお前の誕生日
緋桃の花も咲くだらう、いとしいものよ、
ああ！ もう直き春になるだらう。

⑥ NATSU WA KINU Der Sommer ist da

1. Dort überm Gartenzaun blüht weiß die Hecke schon,
und unser kleiner Kuckuck schreit den ersten Ton,
zögernd zwar, doch schon ganz nah.
Der Sommer, der ist da.

2. Sommerregen rieselt auf die Felder ein,
und die Mädchen pflanzen Reis in langen Reih'n.
Schau, wie naß sind Kleid und Haar.
Der Sommer, der ist da.

3. Hier unterm Vordach duften die Orangen fein,

und vor dem Fenster tummeln sich Leuchtkäferlein.
Seid nur fleißig, sagt ihr Licht uns ja.
Der Sommer, der ist da.

4. Blütenblätter von dem Paternosterbaum,
und dort am Fluß singt's Wasserhuhn im Liebestraum.
Abendmond steht hoch am Himmel klar.
Der Sommer, der ist da.

夏は来ぬ

1、卯の花の 匂う垣根に
時鳥 早も来なきて
忍音もらす 夏は来ぬ

2、さみだれの そそぐ山田に
早乙女が 袷裾ぬらして
玉苗植うる 夏は来ぬ

3、橘の かおる軒場の
窓近く 螢飛びかい
おこたり諺むる 夏は来ぬ

4、疎ちる 川べの宿の
門遠く 水鶏声して
夕月すずしき 夏は来ぬ

⑦ MOMIJI Herbstlaub

Herbst ist es. Tag will scheiden.

Abendlicht auf Bergeshöhh'n.
Wälder bunt sich kleiden,
purpurrot und goldenschön.
Kiefern grün und dunkel,
Ahorn mit Efeugerank geschmückt,
Bergwaldes Farbgefunkel.
Herbst, dein Bild beglückt.

Bächlein im Tal und Quellen,
Blätter sacht herniedergeh'n,
schweben auf den Wellen,
purpurrot und goldenschön.
Farbenbunt sie schimmern,
ferne dort, und hier eins naht.
Herbst webt auf Wasserflimmern glänzenden Brokat.

もみじ 紅葉

1、秋の夕日に 照る山紅葉
こいもうすいも かずあるなかに
松をいろどる かえでやつたは
山のみもとの すそもよう

2、谷の流れに 散り浮く紅葉
波にゆられて はなれてよって
赤や黄いろの 色さまごまに
水の上にも 織る錦

⑧ FUYU NO YORU Winterabend

1. Kerzenschein im kalten Winter,
Mütterlein näht's Kinderkleid.
"Freut euch auf den Frühling,

Kinder,
spielen könnt ihr allezeit!"
Kinderlein voll Freude sinnen,
müde nicht mehr, hell und so wach,
wieviel Tage noch verrinnen.
Zählen's an den Fingern nach.
Feuer flackert uns so warm und traut –
warm und traut.
Draußen heult der Schneesturm laut.

2. Väterlein bei Feuers Lichte
dreht ein Strohseil, fest und starr.
"Höret, Kinder, die Geschichte,
als ich jung und mutig war"
Kinderlein voll Eifer lauschen,
Ohren offen, Äuglein so wach.
Abenteuer klingen, rauschen
lang in ihren Herzen nach.
Feuer flackert uns so warm und traut –
warm und traut.
Draußen heult der Schneesturm laut.

冬の夜

1、燈灯ちかく 衣縫う母は
春のあそびの 楽しさ語る
居並ぶ子どもは 指を折りつつ
日教かぞえて 喜び勇む
囲炉裏火は とうとう
外は 吹雪

2、囲炉裏のはたに 縄なう父は
過ぎしいくさの 手柄を語る
居並ぶ子どもは ねむさ忘れて
耳を傾け こぶしを握る
囲炉裏火は とうとう

外は 吹雪

⑨ YOAKE GARASU Morgenkrähe

Kra-kra, es weckt im Morgengrau'n
uns der Krähenruf.
Es wird Tag, o es wird Tag,
endlich wird es Tag.
Überm Meer, am Himmel ferne,
blinket noch ein Stern.
Auch am Bergespipfel ferne
blinket noch ein Stern.
Nun wird's hell, die beiden Sterne
Sind nicht mehr zu seh'n.
Es wird Tag, o es wird Tag,
endlich wird es Tag.
Es wird Tag, es weckt im
Morgengrau'n
uns der Krähenruf.
Kra-kra, nun ist es endlich hell,
es ist Tag, ist Tag.

夜明けがらす

カホカホ啼くのは
明け鳥

もう夜が明ける
夜が明ける

夜明けの海には星一つ
お山の上にも星一つ

夜明けのお星は

もう見えぬ

ひょうひょうとして

里のみやげに なに貰うた

もう夜が明ける
夜が明ける

大おそどり からす

デンデン太鼓に 笙の笛
金の手筈に 銀の杖

夜明けにや夜明けの明け鳥
カホカホ啼くから夜が明ける

11 KOMORIUTA
Wiegenlied

ねんねんおねむの よいお兒よ
夢のお里で おねねしな

- Schlaf mein Büblein, so hold und lieb,
schlafe, schlafe ein.
Kindermädchen, wo's nur blieb?
Wo nur mag es sein?
- Über den Berg, nach Haus es lief,
schlafe, schlafe ein,
aus der Heimat, am Berg so tief
bracht's dir Gaben fein.
- Tam-tam-Trommel und Flötenklang,
schlafe, schlafe ein.
golden Döslein und Stecken lang,
wofür mag das sein?
- Schlaf mein Büblein, so hold und süß.
schlafe, schlafe ein,
Träume wohnen im Paradies.
Schlaf, Büblein mein.

子守唄

坊やはいお兒 おねねしな
坊やのお守は どこ行った

あの山越えて 里行った

12 KANA KANA
Abendzikaden

Zirpt noch nicht, Zikaden klein!
Sonst bricht die Dämmerung so
bald herein.

Zirpt noch nicht, Zikaden klein!
Sonst verblaßt auf Bambusblatt
der Abendsonnenschein.

かなかな

啼くな、かなかな。
啼けば遙かが暮れ易い。

啼くな、かなかな
小竹の入日が薄れます。

13 ITSUKI NO KOMORIUTA
Wiegenlied aus Itsuki

- Bedienen tu ich hier
nur bis zum nächsten Totentag.
Und ist dies eher als ich dacht'
ich nimmer bleiben mag.

2. Bin nur ein elend
armer Mensch im Bettel-Bettelkleid,
schau auf das prächtige Gewand
der reichen Leut'

3. Und sterb ich einmal elend,
niemand um mich weinen mag.
Nur die Zikaden zirpen leise
im Kiefernhaag.

4. Und wenn ich eines Tages
elend dann gestorben bin,
begrabt mich nur am Wegesrand,
leget Blumen hin.

5. Und welche Blumen? Bitte
an Kamelien doch denkt.
Gießt sie auch niemand, dennoch
Regen
der Himmel schenkt.

五木の子守歌

1、おどんまぼんぎり ぼんぎり
ぼんからさきやおらんと
ぼんがはよくりゃ はよもどる

2、おどんまかんじんかんじん
おんひとたちやよかし
よかし よかおび よかきもん

3、おどんがうっちゅうて
だがにやいてくりゆか
うらの松山せみが鳴く

4、おどんがうっちなだば

道ばたやいける
とおる人ごち花あげる

5、花はなんの花
つんつん椿
水は天からもらい水

14 KANE GA NARIMASU
Die Glocke tönt

Die Glocke tönt,
die Glocke tönt
am Kayanokiyama-Berg.
Der Himmel klar,
doch kalt die Bergesluft.
Fern glüht der Himmel rot.
Der Abendstern,
der Abendstern sogar
hoch oben funkelt,
der Abendstern.
Warum dann
zeigst du dich nimmer,
warum dann zeigst du dich nie?

鐘が鳴ります

鐘が
鳴ります。
かやの木山に。

山は
寒空、
遠雷

ひと星さへ

ちらつくものを
なぜに
ちらりとも、
出て見えぬ。

15 HAKONE HACHIRI WA
Hakone, deine Pfade

Hakone, deines Berges Pfade,
so viele Meilen lang.
Nur auf dem Pferd geht es hinüber.
Doch ist der Strom überflutet,
geht's nicht hinüber.

箱根八里は

箱根八里は
馬でも越すが
越すに越されぬ
大井川

16 HANAYOME NINGYO
Warum weinst du,
Blumenbraut?

- Schimmernd dein Hochzeitskleid,
im Goldbrokat wirst du getraut.
Warum bist du dennoch traurig?
Warum weinst du, Blumenbraut?
- Prächtig dein Haar so schwarz,
und hochgekämmt mir so vertraut.
Warum bist du dennoch traurig?
Warum weinst du, Blumenbraut?

10 KARASU
Der Rabe

Noch dünn das Eis im Reisfeld.
Darauf stolziert - und schon bricht er
ein :
ein leichter Vogel, der Rabe.
Es nickt der Kopf,
doch stramm die Schulter.
Jetzt hat er wohl kalte Füße!
Nickend, Pickend,
macht er sich nichts daraus :
ein leichter Vogel, der Rabe.

からす
鴉

小田の薄ら氷
ふみ破り
踏み渉る
大おそどり からす

首ふり
肩はり
蹴つめたげに

つえばむ

3. Sieh nur, die Kinder spielen
mit den Hochzeitspuppen hier.
Püppchen tragen rote Kleider,
rote Kleider aus Papier.

4. Würde das Püppchen weinen,
würd' zerreißen Ärmel weit.
Und die Tränen wohl verwischten
rubinrotes Hochzeitskleid.

5. Weinen möcht' es, doch es kann's
nicht,
ist vielleicht in großer Not.
Weinen darf's nicht, denn es trägt ja
Kleidchen aus Papier so rot.

花嫁人形

1、金襴緞子の
帯しめながら
花嫁御察は なぜ泣くのだろ

2、文金烏田に
髪結いながら
花嫁御察は なぜ泣くのだろ

3、あねさんごっこの
花嫁人形は
赤い鹿の子の 振り袖着てる

4、泣けば鹿の子の
たもとが切れる
涙で鹿の子の 赤い紅にじむ

5、泣くに泣かれぬ
花嫁人形は
赤い鹿の子の 千代紙衣装

ROSIA NINGYO NO UTA Lieder russischer Puppen

ロシア人形の歌

17 MIZUOKE Widro (Der Wasserkung)

Widro, Widro, Widro,
den Wasserkrug so schlenkernd
geht die Birke wieder Wasser holen.
Widro, Wirro,
der Mond scheint, bald wird es Tag.
Stranari staronka strana radnoj.

ウエドロ (水桶)

ウエドロよ、ウエドロよ、
ウエドロをさげて、
かわい白樺、また水汲みに
ウエドロよ、ウエドロよ、
月夜があける。
スタラナリ
スタロンカ スタラナ ラードナヤ

(註) スタラナリ スタロンカ……
(ここがわたしのふるさとか、
そうだ、そうだよ、ふるさとよ。)

18 MUSUME SAN Dewotschka (Das Fräulein)

Wohin, wohin des Weges,
Dewotschka?
Über Wiesen, über'n Hügel, zum
Jahrmarka.
Klingeling, klingeling,
klingklingeling.
Wie die Lämmlein auf der Weiden
hüpfen und springen,
springe auch ich über's Bächlein
Rutschenka.

ヂェーウオチカ (娘さん)

何処へおいでか、ヂェーウオチカ。
野越え丘越え、ヤアルマルカ。
コロコル コロコル、コオルコル。
牧場に羊もはねてます。
わたしも飛び越そ、ルウチエンカ。

(註) ヤアルマルカ (市場)
コロコル コロコル (リンリンと鈴の
なるさま)
ルウチエンカ (小川)

19 UBA Nanuschka (Die Amme)

Abendröte.
Nanuschka, Rebjoschka,
Komm und sieh dir's an.
Skamejka. Zerbrochen die Bank.

Mijelniza, läuft's Wasserrad.

ニヤーニシュカ (乳母)

夕焼よ。ニーニシュカ。
レビヨンカア、あれ、御覧。
スカミューカこわれてる、
ミューリニツツアマわってゐる。

(註) レビヨンカア (小ちゃい子)
スカミューカ (ベンチ)
ミューリニツツア (水車)

20 USHI Karowa (Die Kuh)

Karowa, Karowa, du Kuh,
wer wohl sieht so aus wie du?
Tak tak hasrascho.
Grün sind deine beiden Hörner,
und so weiß ist dein Gesicht.
Tak tak hasrascho.
Karowa, Karowa, du Kuh,
wer nur sieht so aus wie du?
Tak tak hasrascho.

カロウヴァ (牛)

カロウヴァ カロウヴァ
誰かに似てる。
タァク タァク ハラシオ
お角が緑で、
お顔が白で、
タァク タァク ハラシオ
カロウヴァ カロウヴァ

誰かに似てる
タァク タァク ハラシオ

(註) タァク タァク ハラシオ
(そうだそうだまったくだ)

21 KOBUNE Lotka (Das Boot)

Rotes Boot Lotka,
Sabaka, kleiner Hund Sabaka
sitzet darin.
Und die Wolga aufwärts fahrend,
und die Wolga abwärts fahrend,

Schapka, baumelt's Mützchen.

Mijedrenno - langsam, langsam -
mijedrenno.

ロートカ (小舟)

赤いロートカ、
サバァカのせて、
ヴォルガをのぼり、
ヴォルガをくだり、
シャープカがぶらぶら、
ミエドレノ、ミエドレノ、
ミエドリッド。

(註) サバァカ (小犬)
シャープカ (帽子、シャッポ)
ミエドレノ (ゆらゆらとゆれている)

風に寄せてうたへる春のうた

22 青き臥床をわれ飾る
青き臥床をわれ飾る。
春の恋ぐさ種々の花をつくして、
また君がため白地なす
祝ひの風の茶箱もて、
熱き日光を避けまつらむ。

23 君がため織る綾錦
君がため織る綾錦
春の被衣の恋ごろも
真昼となれば紗に投ぐ
あわれ床しき風の桜。

24 光に顔ひ日に舞へる
光に顔ひ日に舞へる
汝が吹く笛の調べこそ
恋するもの心にか、
熱き涙とあこがれと
風はさあらぬ節まはし。

25 たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
春ぞ来ぬると風の群、
たたへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
げににぎはる恋幸を。まことの幸を。